

英語学習者が感じる不安と 習熟度テスト得点との関連について

野本 尚美・*上村 英男

(2025年2月17日受理)

The Relationship between Anxiety Perceived by English Language Learners and Proficiency Test Scores

NOMOTO Naomi・KAMIMURA Hideo

要約：本研究の目的は、学習者が授業内で行う活動についてどの程度の不安を感じているか調査することと、それらが英語習熟度テストとどのように関連しているのかについて明らかにすることである。非英語専攻の短期大学1年生73名を対象として、英語の授業中に行う21種類の活動について、それぞれどの程度不安を感じるか10段階で回答させるアンケートを実施したところ、「英文を覚えてクラス全体の前で発表する」、「自分の気持ちや考えについてクラス全体の前で英語で発表する」などの活動は不安度が高いことがわかった。また、英語習熟度テストとの相関について調べたところ、話す活動だけでなく「教科書や問題集の英文を日本語に訳す」、「自分の気持ちや考えを英語で書いて先生に見せる」といった活動についても弱い負の相関が見られた。この結果から、教師がこれらの活動を行う際には学習者の不安を軽減させるような工夫が必要であることが示唆された。

Key words：外国語不安 習熟度テスト 英語教育

1. はじめに

外国語教育においては、異文化に対する理解を深め、積極的に他者とコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することが求められている。そのため英語教師は、授業内においてコミュニケーションの相手や目的を意識した活動を行うために、実際に起こり得るコミュニケーション場面をできるだけ明確に設定しようとすることがある。この際、特に他者とのかわりに困難さを感じる学習者は学習に対する意欲が低下する可能性があるため、他者と英語でコミュニケーションをとる際に学習者がどのような感情を抱くのかという点について、これまで多くの研究が行われてきた。

Horwitz, Horwitz, & Cope (1986) は、外国語を

学習する状況において聞く活動と話す活動を行う際に不安が高まり、特に、最も不安をかき立てるものは外国語で「話す」という行為であるとしている。¹⁾

また八島 (2019) は、特に大人が外国語を学習する場合に情意面を考慮することの重要性について次のように述べている。「人は、ことばによるコミュニケーションで自己を認識し、自己を表現し、他者に対して自己を開いていきます。それゆえに『自分が自由に操れないことば』を用いて自己表現することに伴う心理を十分に考慮する必要があります。しかも言葉は習得してから使うのではなく、使いながら習得するのです。それゆえ、自由に操れない段階でも使っていけないと上達しないというパラドックス的状况があります。このことは、自己表現を完全に

* 福岡工業大学短期大学部 情報メディア学科

できる言語をもつ大人にとって時に屈辱的すらあります。私はこの点が外国語の学習に特有の情動的な側面であり、学習者の不安を上昇させたり、コミュニケーションを避ける傾向につながると考えています。大人と子供の言語習得が最も違う点のひとつは、不安などの情意面であると言えるでしょう。」²⁾

Spielberger (1972) によれば、「不安」は、「自律神経の活性化または覚醒によって起こる主観的な緊張、懸念、心配などの感情で特徴づけられる不快な情緒的状态や認知」(“unpleasant emotional state or cognition which is characterized by subjective feelings of tension, apprehension, and worry, and by activation or arousal of the automatic nervous system”) と定義されている。³⁾ また外国語不安 (language anxiety) とは、「学習者が第二言語・外国語を用いて何かをすることを期待されたときに起こる不安感」(“fear or apprehension occurring when a learner is expected to perform in a second or foreign language”) と定義されている (Gardner & MacIntyre, 1993)。⁴⁾

不安と外国語の習熟度や成績について、多くの研究者が不安の測定値と外国語のテスト結果について相関を調べ、不安と外国語の成績に負の相関があることを示している。例えばElkhafaifi (2005) は、アメリカの大学でアラビア語を学ぶ学習者233名を対象に行った調査で、学習全体についての学習不安と学習成績との間に負の相関 (-.54) がみられ、リスニング不安とリスニング成績との間にも負の相関 (-.70) がみられたと報告している。特にリスニングにおいて不安と成績に高い相関が見られたことは、両者に強い関係があることを示唆している。⁵⁾

日本における研究では、英語の授業の中で具体的にどのような活動の際に学習者が不安を感じているのか、また、それらの活動における不安と習熟度との関連については詳細な研究が行われているとは言えない。そこで本研究では、学習者が授業内で行う活動についてどの程度の不安を感じているか調査し、それらが英語習熟度テストとどのように関連しているのかについて明らかにすることを目的とする。

2. 研究課題

本研究では以下の2点を研究課題とする。

短期大学生を対象として、

- (1) 英語の授業の中で行われる活動について、学習者が不安を感じやすい活動とはどのようなものか調査する。
- (2) 習熟度テストと負の相関が見られる活動 (習熟度が高い学習者よりも低い学習者の方が不安を感じやすい傾向がある活動) はあるのか、もしあるとすればそれはどのような活動か調査する。

3. 研究方法

本研究は、まず学生たちがこれまで英語の授業の中でどのような活動を行ってきたのかを調査することから始めた。2021年10月に非英語専攻の短期大学生2回生90名を対象として、これまでの (中学・高校時代を含めての) 英語の授業において行ったことがある活動について自由記述形式で調査した。その結果、21種類の活動に分類することができた (表1)。この調査結果をもとに、2024年度の学生を対象として「不安を感じやすい活動」と習熟度テストとの相関を調べた。

今回対象としたのは、英検準2級レベルの英語力を身に付けることを目標とする授業の受講者 (非英語専攻の短期大学生1回生73名) である。英語の授業で表1の活動を行った際にどの程度の不安を感じるかアンケート (資料1) を行った。数値の記入の仕方についてはYashima (2002)⁶⁾ を参考にし、参加者は、全くまたはほとんど不安を感じない場合は0~2、多少の不安を感じる場合は3~7、かなり不安を感じる場合は8~10の数値を活動ごとに記入した。なお、実際にそのような活動を経験したことがない場合でも、実際に授業内で当該活動を行う場面を想像して回答するよう指示した。併せて表1に挙げられている活動以外に、英語の授業で不安を感じる場面があれば回答 (自由記述) するよう求めた。また、英語習熟度テストとして実用英語技能検定準2級のリーディング問題とリスニング問題 (各25点、合計50点満点) を実施した。⁷⁾

表1 英語の授業で行われた活動内容
(学生アンケートによる回答を分類したもの)

項目 番号	活動内容
1	英語で自己紹介をする
2	リスニング問題をする
3	映画を見る
4	洋楽を聴く
5	ペアで教科書の文を音読する
6	先生の文法の説明を聞く
7	文法の問題を解く
8	英単語テストを受ける
9	みんなで一緒に教科書の英文を音読する
10	クラス全体の前で教科書の文を一人で音読する
11	教科書や問題集の日本語を英語に訳す
12	教科書や問題集の英文を日本語に訳す
13	先生が黒板などに書いたことをメモしておく
14	先生が話したことをメモしておく
15	英文を覚えてクラス全体の前で発表する
16	自分の気持ちや考えを英語で書いて先生に見せる
17	自分の気持ちや考えを英語で書いて他の生徒に見せる
18	自分の気持ちや考えについて先生に英語で話す
19	自分の気持ちや考えについてペアで英語で話す
20	自分の気持ちや考えについてグループで英語で話す
21	自分の気持ちや考えをクラス全体の前で英語で発表する

4. 結果

4.1 各項目の回答結果

英語の授業における活動時の不安についての平均値及び標準偏差と、習熟度テスト得点と21項目それぞれの不安度との相関（Pearsonの相関係数）は表2のとおりである。

その中で不安度が高い（平均値が5.0以上だった）活動をまとめたものが図1である。最も不安が大きい活動は「自分の気持ちや考えをクラス全体の前で英語で発表する」という活動である。図1から、下記3点の活動が学習者にとって不安が高まる可能性が高い活動であると考えられる。まず一つ目は、クラス全体の前で英語を話さなければいけない活動（項目番号15、21）である。教科書の音読も含めて、クラス全員の前で自分一人が英語を言わなければならない状況においては、学習者の不安度がかなり高まると推察できる。二つ目は、自分の気持ちや考え

を表現する活動（項目番号16～21）である。話す場合だけではなく、書いたものを他の生徒や教師に見せる場合も、学習者によっては不安を感じる可能性がある。また、三つ目として、英語を日本語に、もしくは日本語を英語に訳す活動（項目番号11、12）において不安を感じる傾向が見られる。これらの活動では、自分が訳した表現や語彙が間違っているのではないかという不安を多くの学習者が感じていると考えられる。

また、ここに挙げられている21種類の活動以外で不安を感じる場面については「先生にあてられて答えがわからないとき」「理解が追いつかないまま授業が進んでいくとき」「授業内の説明を全て英語でされたとき」「音読や英作文について時間制限があるとき」「ALTの先生と1対1でスピーキングテストをするとき」「英語の長文を読むとき」という回答があった。

表2 参加者の回答結果

項目 番号	平均値	標準偏差	習熟度テストとの相関 (*p<.05, **p<.01)
1	6.32	2.91	-.272*
2	6.03	2.46	-.339**
3	1.95	2.64	-.008
4	1.40	2.25	.060
5	3.64	2.93	-.215
6	4.00	2.82	-.080
7	7.00	2.32	-.322**
8	6.47	2.75	-.344**
9	2.82	2.90	-.060
10	7.38	3.10	-.401**
11	7.22	2.18	-.410**
12	6.23	2.41	-.572**
13	1.37	1.79	.034
14	1.85	2.08	.017
15	8.01	2.47	-.462**
16	6.63	2.55	-.500**
17	7.07	2.23	-.415**
18	7.54	2.24	-.407**
19	6.75	2.63	-.380**
20	7.29	2.61	-.289*
21	8.88	1.84	-.531**

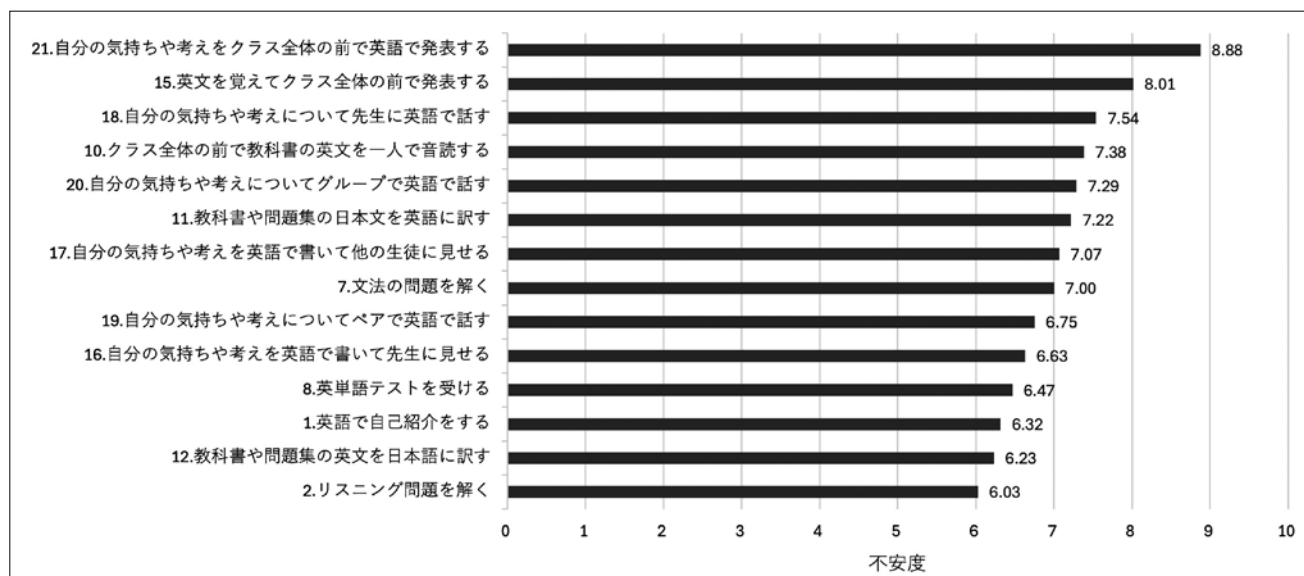


図1 アンケート平均値が5.0以上の活動

4.2 習熟度テストとの相関

習熟度テストの結果と、21種類の活動に対する不安度との相関を調査した結果（表2）を見ると、項目番号10「クラス全体の前で教科書の英文を一人で音読する」（ $r = -.401^{**}$ ）、項目番号15「英文を覚えてクラス全体の前で発表する」（ $r = -.462^{**}$ ）といったクラス全体の前で一人で話す場面や、項目番号11「教科書や問題集の日本語を英語に訳す」（ $r = -.410^{**}$ ）、項目番号12「教科書や問題集の英文を日本語に訳す」（ $r = -.572^{**}$ ）といった言語を翻訳する場面、そして、項目番号17「自分の気持ちや

考えを英語で書いて他の生徒に見せる」（ $r = -.415^{**}$ ）、項目番号16「自分の気持ちや考えを英語で書いて先生に見せる」（ $r = -.500^{**}$ ）、項目番号21「自分の気持ちや考えをクラス全体の前で英語で発表する」（ $r = -.531^{**}$ ）などの自分の気持ちや考えを他人に伝える場面では、負の相関が見られた。この中で相関が高かった項目番号12「教科書や問題集の英文を日本語に訳す活動」と項目番号21「自分の気持ちや考えについてクラス全体の前で英語で発表する活動」について、習熟度と不安度の散布図及び回帰直線を下記に示す（図2、図3）。

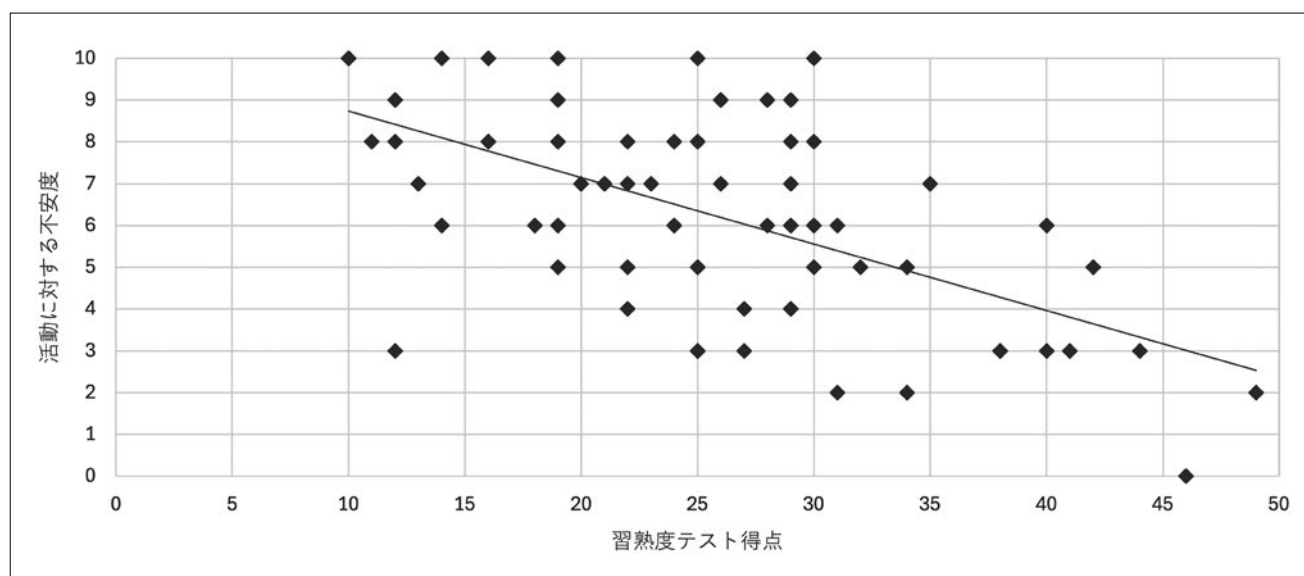


図2 「教科書や問題集の英文を日本語に訳す活動」に対する不安度と習熟度テスト得点の散布図及び回帰直線

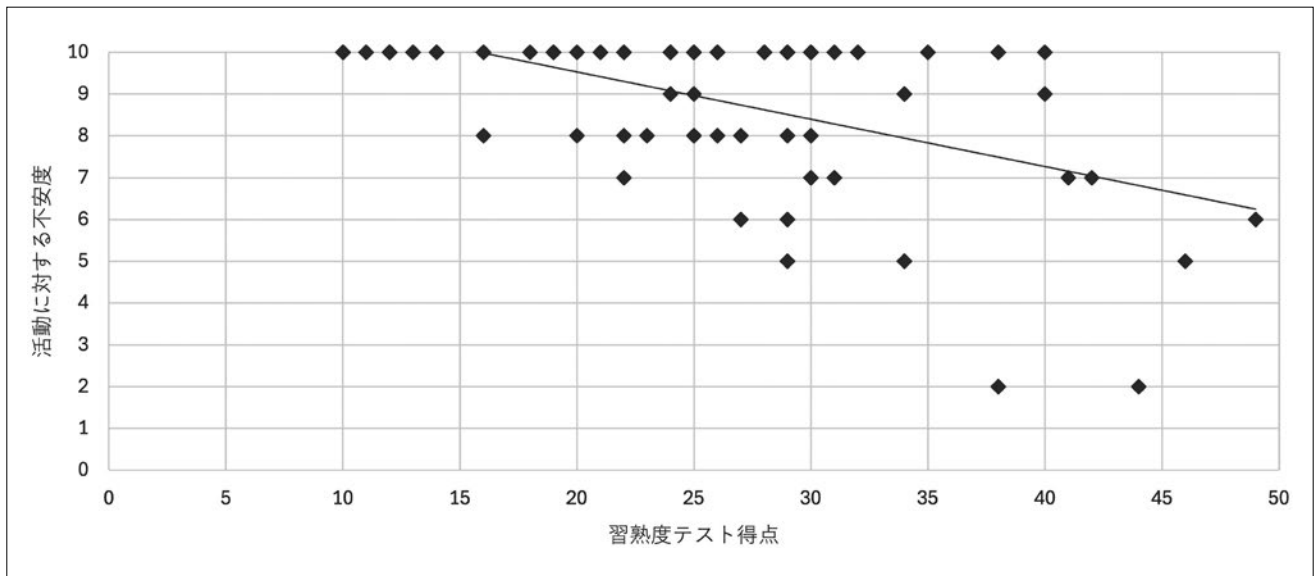


図3 「自分の気持ちや考えについてクラス全体の前で英語で発表する活動」に対する不安度と習熟度テスト得点の散布図及び回帰直線

以上のことから、学習者が不安を感じやすい活動について調べた結果と同じように、クラス全体の前で英語を話さなければいけない活動（項目番号10、15）や、自分の気持ちや考えを表現する活動（項目番号16、17、18、21）、そして英語を日本語に、もしくは日本語を英語に訳す活動（項目番号11、12）においては、習熟度テストの得点との間に負の相関があることが明らかになった。

5. 考察

調査結果から、学習者はクラス全体の前で英語を話さなければいけない活動や、自分の気持ちや考えを表現する活動、また翻訳する活動において特に不安を感じやすく、またそれらは習熟度が低い学生の方がより不安を感じやすい傾向が見られることがわかった。

ベネッセ教育総合研究所が発表した「高3生の英語学習に関する調査＜2015-2021継続調査＞」(2022)においては、「英語の授業でしていたこと(中3・高1・高3)」として、「英文を日本語に訳す」という活動は、中学3年時に86.2%、高校1年時に87.6%、高校3年時に84.6%が「していた」と回答している。このことから、「英文を日本語に訳す」という活動は中学から高校にかけてどの学年でも行われている活動であることがわかる。「自分の気持ちや考えを英

語で書く」活動については中学3年時に65.4%、高校1年時に57.3%、高校3年時に54.1%が「していた」と回答し、「自分の気持ちや考えを英語で話す」活動は中学3年時に58.9%、高校1年時に54.3%、高校3年時に46.0%が「していた」と回答した。これらの活動は学年が上がるにつれて減少傾向が見られるが、高校3年時においても約半数が「していた」と回答していることから、多くの英語教員が授業に取り入れる活動であることがわかる。⁸⁾教師がこれらの活動を授業で行う際には、学習者が不安を感じやすいことを意識し、特に英語があまり得意でない学習者が大きな不安を抱える傾向があるため、不安を軽減させる工夫が必要であると考えられる。

学習者の不安についてDörnyei (2001, 米山・関訳) は、英語学習に対する動機づけを高めるための戦略として「学習環境において不安を誘発する要素を取り除き、あるいは緩和することによって、言語不安を軽減することを支援する」ことが大切であると述べており、具体的には「目立たない方法であっても社会的比較は避ける」、「競争でなく協調を促進する」、「学習過程の一部として間違いをするという事実を学習者が受容するのを支援する」ことなどを挙げている。特に間違いに対する恐れについては「言語教室にはこの恐れを非常に強く感じる生徒がおり、彼らは実際、思い切って文法的な誤り

を犯すよりも沈黙を続けようとする。言語教師は、すべての間違いを訂正するのが癖になりやすいものである。」と述べ、さらに「現代の教授法は概して、生徒のコミュニケーションを抑圧しないために間違いを選択的に訂正することを勧めており、動機づけの観点からすると、間違いは弾圧されるべきものではなく、学習に自然に付随するものとしてむしろ受け入れられるべきものである。教師はこの受容の手本を、教師自身の言語の誤りに対応することによって示すことができる（とりわけ母語話者でない教師は）。」と助言している。⁹⁾学習者が英語を習得する過程において間違いを犯すことについて教師はより寛容になるべきであり、間違いの訂正の仕方についても学習者が受け入れやすくなるような工夫が必要であると考えられる。

6. まとめと今後の課題

この研究の結果、学習者がいくつかの活動において不安を感じやすく、またそれらの活動と英語習熟度との間に負の相関があることが明らかになった。しかし、授業において具体的にどのような工夫をすれば学習者の不安を和らげることができるのか、また、学習者の性格（内向性、外向性など）は外国語学習においてどの程度影響しているのかなどという点についてはまだ明らかになっていない。英語は他者とコミュニケーションをとるための手段であるが、英語の授業において不安や苦痛を頻繁に感じることは他者とのコミュニケーション自体を楽しめないということにつながってしまう可能性もある。すべての学習者が前向きに英語学習に取り組めるような環境を用意できるよう、今後も調査を進めたい。

引用文献

- 1) Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70(2), 125-132.
- 2) 八島智子 (2019). 『外国語学習とコミュニケーションの心理—研究と教育の視点』 大阪：関西大学出版部
- 3) Spielberger, C. D. (Ed.). (1972). *Anxiety: Current trends in theory and research*, Vol. 1. New York: Academic Press.
- 4) Gardner, R. C., & MacIntyre, P. D. (1993). On the measurement of affective variables in second language learning. *Language Learning*, 43, 157-194.
- 5) Elkhafaifi, H. (2005). Listening comprehension and anxiety in the Arabic language classroom. *The Modern Language Journal*, 89(2), 206-220.
- 6) Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86(1), 54-66.
- 7) 旺文社編集 (2024). 『2024年度版 英検2級 過去6回全問題集』 東京：旺文社
- 8) ベネッセ教育総合研究所 (2022). 『高3生の英語学習に関する調査(2015-2021継続調査)』 〈https://benesse.jp/berd/global/research/detail_5748.html〉 (参照 2025-02-18)
- 9) Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge : Cambridge University Press.(ブルタン・ドルニエイ、米山朝二・関昭典(監訳) (2005). 『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』 東京：大修館書店)

資料1. 不安に関するアンケート

以下の活動について、あなたが英語の授業で行った際にどの程度の不安を感じるか、以下を参考にして（ ）内に数値を記入してください。※そのような活動を行ったことがない場合でも想像して回答してください。

- ・全くまたはほとんど不安を感じない⇒0～2
- ・多少の不安を感じる⇒3～7
- ・かなり不安を感じる⇒8～10

- (1) 英語で自己紹介をする ()
- (2) リスニング問題を解く ()
- (3) 映画を見る ()
- (4) 洋楽を聴く ()
- (5) ペアで教科書の文を音読する ()
- (6) 先生の文法の説明を聞く ()
- (7) 文法の問題を解く ()
- (8) 英単語テストを受ける ()
- (9) みんなで一緒に教科書の英文を音読する ()
- (10) クラス全体の前で教科書の文を一人で音読する ()
- (11) 教科書や問題集の日本語を英語に訳す ()
- (12) 教科書や問題集の英文を日本語に訳す ()
- (13) 先生が黒板などに書いたことをメモしておく ()
- (14) 先生が話したことをメモしておく ()
- (15) 英文を覚えてクラス全体の前で発表する ()
- (16) 自分の気持ちや考えを英語で書いて先生に見せる ()
- (17) 自分の気持ちや考えを英語で書いて他の生徒に見せる ()
- (18) 自分の気持ちや考えについて先生に英語で話す ()
- (19) 自分の気持ちや考えについてペアで英語で話す ()
- (20) 自分の気持ちや考えについてグループで英語で話す ()
- (21) 自分の気持ちや考えをクラス全体の前で英語で発表する ()

2. 上記以外で、あなたが英語の授業で不安を感じるのはどのような場面ですか。具体的に記入してください。